【第４６回城戸賞　応募作品】

出戻りサト子

岡田　鉄兵

【あらすじ】

山野サト子（三十）は大阪で男女コンビの漫才師をしている。才能があり、賞をいくつも取っていたが売れずにくすぶっていた。相方の西口とは恋人関係でもあった。

ある日、西口の浮気現場を発見。問い詰めると相手は妊娠までしていた。度重なる借金、仕事のサボり癖、その上今回の件。サト子の我慢は限界だった。漫才コンビを解散。芸人を引退し、大阪を去る事にした。

奈良のど田舎に帰って来たサト子。十年前、駆け落ち同然で家を出て以来の帰郷だ。父は亡くなり、母と姉が住んでいた。サト子の突然の帰宅に母は困惑、姉には厳しい嫌味を言われるが耐えるしかなかった。

そんな折、サト子が所属していた芸能事務所の社員・田所がやって来た。彼は舞台で活躍するサト子に惚れて、会社に入社。彼女をどうにかして売れっ子にしようと必死に働いていた熱血漢。「芸人に戻りませんか？」と復帰の誘いに来たのだ。

あっさり断るサト子。だが心の奥底には漫才で爆笑を取った日々が忘れられないでいた。

元相方の西口から突然、連絡がある。「お前は芸人に戻った方がいい！」。揺れ動くサト子の気持ち。病気がちな母、結婚して出ていく姉、そんな時、自分自身が妊娠していると分かり、悩みに悩むサト子。

そこへまた田所が来た。サト子とお腹の子供も背負う覚悟で「もう一度挑戦しましょう」と口説く。家族の猛烈な反対に合うが、全くひるまない田所。その姿を見たサト子たちの気持ちが変わる。

二人は一流のお笑い芸人になるため、東京へと向かうのだった。

【登場人物表】

山野　サト子（三十）　漫才師
西口　博人（三十）　漫才師
田所　一哉（三十三）　芸能事務所社員

山野　君枝（六十六）　サト子の母
山野　マキ（三十五）　サト子の姉
大久保　雅一（四十二）　副工場長

竹本　茂（六十一）　芸能事務所社長
五十嵐　清（七十五）　医師
片岡　萌（二十九）　ＯＬ

運転手
キャバ嬢
女１
女２
女３
女性コンビ１
女性コンビ２

その他

○　新世界の風景（夜）
七月下旬、梅雨が明けた日。
通天閣の足元に広がる繁華街。
ど派手な看板やきらびやかなネオン、あちこちに鎮座するビリケンさん。
レトロな雰囲気があり、とても大阪らしいところ。
狭い道を大勢の観光客が楽しそうに歩いている。

○　通天閣演芸ホール・表（夜）
黒縁メガネの真面目そうな男、田所一哉（三十三）がスマホで電話をしながら全速力で走って来る。
田所「（スマホに）今からちょっとありまして……明日、折り返しご連絡致しますので」
と切り、演芸場に駆け込んでいく。
中から笑い声が聞こえて来る。

○　同・場内（夜）
地下にあるお笑いの小劇場。
めくりに『楽園』の文字。
舞台では山野サト子（三十）と西口博人（三十）が漫才をしている。
客席は埋まり、そこそこウケている。
一番後ろの田所は真剣に見つめている。
西口「もうええわ！　どうもありがとうございました」
漫才が終わり、客から拍手が起こる。
袖に戻ろうとする西口、それをサト子が捕まえて行かさない。
サト子「まだ終わらさへんで」
西口「え？」
サト子「今日は、お前に文句がある」
西口「そんなん楽屋で聞くがな」
サト子「お客さん、ちょっと聞いて下さい」
西口「なんで始めるねん」
サト子「こいつと同棲してるんやけど、家事も漫才のネタもウチが作ってるんです。やのにギャラは半々。生活費も出させるんで

すよ。めっちゃおかしいでしょ？」
西口「こんなとこで言う事か」
サト子「その上、肝心の夜の方はさっぱり。あんなん小鳥の交尾やで。こうやって、ちゃんとやらんかい」
と下品に腰を振る。
大ウケする客たち。
西口「恥ずかしい。もう行くぞ」
再度袖に帰ろうとする西口、そうはさせじと腕を引っ張って戻すサト子。
サト子「フラフラしな、金玉か。あ、そういや顔もそんな感じやわ」
西口「誰がや！　もうネタは終わってるねん」
サト子「お前は漫才まで早漏か！」
客が一番沸き、場内が揺れる。
田所も心の底から笑っている。
サト子はマシンガンのように喋り、躍動的に動き回る。
観客は完全に魅了されている。

○　同・控え室への通路（夜）
細い通路に芸人やスタッフが行き交う。
そこを出番の終えたサト子と西口が歩く。
向かいから田所がやって来た。
田所「（目を輝かせ）お疲れ様です。少しよろしいですか？」
西口「（サト子に）頼むわ」
と行ってしまう。
サト子も続こうとするが、前に田所が立って行かせない。
サト子「また来られてたんですか」
田所「楽園さんの舞台は毎回見させて頂いてます。今日も最高。特に最後のアドリブが」
サト子「（鼻で笑う）」
田所「何かおかしな事言いました？」
サト子「いや。で、話って何です？」
田所「来年、結成十周年という事で。会社としても今後の売り方を考えていきたいと」
サト子「はあ」
田所「ユーチューブやＳＮＳもいいですが、

ラジオはどうですか？　サト子さんのトークの面白さを色んな世代に知って貰いたい」
サト子「ラジオか……」
田所「爆発的に人気が出ると思います。それで、局に売り込みをと」
サト子「お任せします」
田所「では、まずラジオ近畿あたりから」
　サト子は使い古された手帳を取り出し、赤ペンで何か書き始める。
田所「それからＦＭ局も回りまして、最終的にはケーブルテレビの方へも……」
　書くのに必死で話を聞いていないサト子。
田所「あの～」
サト子「ああ、ごめんごめん」
　と手帳を直す。

○　同・控え室（夜）
　西口がサト子のカバンをあさり、財布から札を何枚か抜いて返す。
　そこにサト子が入って来る。
西口「じゃ、行くわ」
サト子「田所さんが売り込みに行きたいって、ラジオ局に」
西口「ラジオ？　俺、フリートーク苦手や」
サト子「色んな事に挑戦していかんと」
西口「（スマホを見て）後輩、メシ連れてかなアカンから」
　去ろうとする西口の後ろポケットから財布を抜くサト子。
西口「何するんじゃ」
サト子「ウチのお金で奢る気か？」
西口「はあ？」
サト子「財布から抜いてるの、気付かんとでも思ってるん？」
西口「テキトーな事言うな。証拠あるんか」
　サト子、財布から札を取り出す。
サト子「（札の余白を指さし）なんて書いてる？」
　『ドロボー芸人』と小さく書かれていた。
西口「ふざけた事してくれるやんけ」

サト子「ふざけてるんはあんた。パクった金でメシ食わして恥ずかしくないん？」
西口「かわいい後輩に奢るのが先輩芸人の仕事や」
サト子「何が仕事じゃ、闇営業してでも稼ぜ。お前の遊びのためにウチは働いてるんとちゃう」
一瞬の沈黙。
西口「すまん！　ちゃんと返すから、今日のところは」
サト子「浮気女おるのも知ってるねんで」
西口「勝手にほざいとけ」
と財布を奪い返し、出ていく。
その後ろ姿に罵声を浴びせるサト子。
サト子「女の金で飲む打つ買うか。その前に舞台で笑わせ。三流芸人！　クズ芸人！　ヒモ芸人！」
顔を真っ赤にして戻って来る西口。
西口「もういっぺん言うてみい！」
サト子「何べんでも言うたる。三流クズヒモのクソ芸人が！」
西口「文句増えてるやんけ！　このブスが！」
サト子「何やと！　かかって来い！」
サト子と西口の取っ組み合いが始まる。芸人仲間が覗きに来るが、ニヤニヤするだけで止めない。
慌ててやって来る田所、二人に服を引っ張られながらも間に入る。
西口「お前シバく！」
サト子「女やからって舐めてたらいてまうぞ。秒で殺したる！」
田所「（西口に）女性に暴力はやめて下さい」
サト子、隙をついて強烈なパンチ。
西口の顎にヒットし、床にひっくり返る。
田所「（感嘆）おー」

○　同・裏口（夜）
田所がキョロキョロしながら待っている。
地下階段を疲れた足取りで上って来るサト子、バレないように去ろうとする。

田所「（気付き）あ、サト子さん。（周りを
見て）相方さんは？」
サト子「とっくに逃げた」
田所「（顔を見て）ケガがなくてよかった」
サト子「あんなケンカ、いつもの事。……し
まった。カネ持ってかれたままや」
田所「では、お話の続きはギトギトで」
サト子「ギトギト？」

○　ラーメン屋・店内（夜）
カウンターで油ギトギト豚骨ラーメンを
無言で食べているサト子と田所。
田所「……ボクってつまらないですか？」
サト子「（チャーシューを頬張ったまま首を
横に振る）」
田所「大阪の漫才師に憧れて岐阜県から一浪
して、こっちの大学に来ました」
サト子「京大？」
田所「阪大です」
サト子「一流大学やのに、なんで小っちゃい
お笑い事務所に来たん？」
田所「芸人さんとの距離感が近く、一緒に力
合わせてやっていけると思いまして」
サト子「（興味なく）そ」
田所「サト子さんはお隣の奈良県出身。近く
ていいですよね」
サト子「まあ。田所さん、彼女は？」
田所「いません。……ずっと」
サト子「ゲイやったっけ？」
田所「違います。確かにこの業界多いですが」
スープをすするサト子。
田所「学生時代、お笑いサークルで漫才をし
てたんです。だけど才能が無かった。関西
弁が下手というハンデもあったんですが。
その時にサト子さんたちの漫才を見て。あ、
この話、前にもしましたね？」
サト子、店のテレビでバラエティ番組を
見ている。
田所「いつか、ああなれるよう頑張りましょ」
サト子「あいつらはタレント。ウチは芸人や」

田所「すみません。お笑い芸人は板の上に立って、目の前のお客さんを笑わさてナンボですね」
　テレビに釘付けのサト子。
田所「……やっぱりボクってつまらないですよね」
サト子「（テレビを指さし）あの迷彩Tシャツの男、昔うちの事務所におった」
田所「東京の大手に引き抜かれ、一気に売れました。大阪では全くウケてなかったのに」
サト子「今でもおもんないで」
田所「ですです」
サト子「しかしあか抜けよったわ」
田所「（話を変え）楽園さんの今後ですが」
サト子「ウチら、変わる気はない」
田所「今のままでは難しいです。漫才だけでなく頭下げて売り込んでいかないと」
サト子「（さえぎり）考えとく」
田所「去年も一昨年もそう仰いました」
サト子「（とぼけて）そうやったっけ？」
　田所、サト子のスカートに目がいく。
　破れていて太ももが露わになっている。
田所「（スカートを指さし）あの～」
サト子「（気付き）うわっ、サイアク。買ったばっかりやのに、あのクソ相方め」
　カバンから安全ピンを取り出す田所。
サト子「女子やん。てか、やっぱゲイやん」
田所「（安全ピンを差し出し）どうぞ」
サト子「お願い」
　となまめかしい太ももを見せる。
　田所は緊張しながらもピンで留める。
サト子「ありがと」
田所「（照れて）いえ」

○　駅への道（夜）
　サト子と田所が並んで歩いている。
サト子「敬語やめたら？　ウチら同期やん。年齢もそっちが上やし」
田所「入社は半年あとなので」
サト子「細かいなぁ」

田所「キチッとしときたいんです」
サト子「ラーメンは奢ってくれたやん」
田所「ボクが誘いましたから」
サト子「でも後輩やん。訳わからん」
田所「ですね」
　思わず笑ってしまうサト子。
　田所も嬉しそう。
　前方のコンビニ前で、西口とキャバ嬢がコンビニチキンを頬張っている。
　田所、急に道を曲がろうとする。
田所「（サト子の腕を取り）あー、こっちです。こっち」
サト子「真っすぐの方が近いで」
田所「工事してました」
サト子「してへんよ。来る時、通ったもん」
　と田所の手を振り払い、歩いていく。
　すると西口を発見。
サト子「（田所を見て）そういう事」
田所「……すみません」
　そーっと近づき、西口の前に飛び出すサト子。
サト子「おい」
西口「（驚き）出たっ！」
サト子「お化けみたいに言うな。（キャバ嬢を見て）かわいい後輩って、これ？」
西口「こ、こ、こいつはちゃうんや」
サト子「あっちで腰振って、こっちで腰振って忙しいな。生まれ変わったら漫才師より種馬になり」
西口「やかましいわ」
サト子「（コンビニチキンを見て）もっとええもん食わしたれよ」
西口「これが一番旨いねん」
キャバ嬢「西ちゃん、この人、だれ～？」
サト子「黙れ、しょーもないの」
キャバ嬢「しょーもない？」
サト子「お前の事じゃ！」
キャバ嬢「怖い～」
西口「話は明日する。帰ってくれ」
サト子「芸人やる気あるん？」

西口「ある」
サト子「本気で？」
西口「……」
　サト子、初めてキャバ嬢が妊娠している事に気付く。
サト子「（大きなお腹を見て）ガチか？」
西口「……」
サト子「ガチかって？」
西口「……ガチや」
　急に動かなくなるサト子。
西口「（心配で）お、おい」
サト子「ジ・エンド」
西口「はあ？」
サト子「終わりや」
キャバ嬢「終わりだってー。お・わ・りー！」
西口「（キャバ嬢に）お前は黙っとけ！　（サト子に）それは付き合いがって意味か？　それともコンビ自体を」
サト子「（さえぎり）どっちもじゃ」
田所「えー！　（必死に）サト子さん、ボクが何とかするんで考え直してください！」
西口「そやそや。慌てて答え出しても、ろくな事ない。長年、連れ添った仲やないか」
田所「はい、夫婦漫才師は離婚してから売れるものです」
サト子「結婚してへん」
西口「してたようなもんやろ」
キャバ嬢「とりま落ち着いて～」
サト子「じゃかましい！」
キャバ嬢「ヤバみ～」
サト子「（西口に）ウチが終わり言うたら、終わりなんじゃ」
　行こうとするサト子、前に西口が立つ。
西口「待てって」
　サト子が殴る真似をすると、西口はビビって道をあける。
サト子「ヘタレが」
　無表情で駅の方に歩いていくサト子。
田所「（慌てて）ちょ、ちょっとちょっと」
西口「話聞けや！」

田所と西口が必死に追う。
残されたキャバ嬢、コンビニチキンを再び食べ出す。
キャバ嬢「うまうま～」

○　メインタイトル『出戻りサト子』

○　十津川駅・表
炎天下の中、セミの鳴き声が響いている。
田舎の駅のロータリーに小型の路線バスが停まっている、ドアが閉まる。
駅から大きなキャリーバックを引き、鬼の形相のサト子が大股で走って来た。
サト子「待ってー待ってー。待たんかーい！」
ドアが開き、乗り込むサト子。

○　走るバス・車内
客は五名、全員老人。
息を切らせたサト子、運転手の後ろの席に座る。
サト子「（運転手に）すみません。助かりました」
運転手はマイクを付けているので、声はスピーカーで車内に聞こえる。
運転手「おかげでいいもの見れたよ」
客全員が笑う。

○　サト子の夢
便器に座っているサト子。
何かを見て固まる、妊娠検査薬だ。
サト子「（陽性を確認し）……待ってーや」

○　走るバス・車内
ガタンとバスが揺れ、目を覚ますサト子。
いつの間にか客は減り、寝ているおじいさんと二人だけ。
懐かしそうに窓外を眺めるサト子。
バスが停留所で停まる。
運転手「佐竹さん……佐竹さん！」
おじいさんは眠ったまま。

席までいき、揺すって起こす運転手。
運転手「いつまで寝てるんです」
おじいさん「(目覚め) ワシは食べてへんぞ」
運転手「また寝ぼけて。もう着きました」
おじいさん「ほうかほうか」
と降りていく。
運転手は席に戻り、運転を再開。
車内の客はサト子だけになる。
運転手「観光？」
サト子「まあ」
運転手「そりゃ、そうか。あんたみたいなよそ者は、ここじゃ住めんな」
サト子「そんな事は」
運転手「私は東京で失敗して、仕方なくこんな仕事をしてる。この村は地元民か、流れ者のどっちかだ」
サト子「そうですか」
運転手「八年前、大阪の隣だって聞いて来たが三時間半もかかるとは。飛行機だったら外国着いちゃうよ」
とガハハッと豪快に笑う。
サト子「……」
運転手「(前を指さし) あれ、知ってる？」
前方に大きなつり橋が見える。
サト子「日本で二番目に大きい木製のつり橋」
運転手「去年、三番になった。でも今は違う事で有名だ」
サト子「違う事？」
運転手「自殺の名所。数年前からネットで噂になってね。ホント、迷惑な話だよ」
サト子「へえ」
運転手「半年前におネエちゃんくらいの子がフラれたとかでやって来て。数時間後には橋から身投げしたらしい」
サト子「……」
運転手「(バックミラーでサト子を見て) じゃないよね？」
サト子「何がです？」
運転手「ドボーンするんじゃ？」
サト子「ちゃいます、ちゃいます」

と降車ボタンを押す。

○　バス停・エレクトロ工場前
　周りに何もなく、少し離れたところに工場が見えている。
　バスが来て、サト子が降りる。
運転手「じゃ、元気でね」
サト子「嘘ついてました」
運転手「へ？」
サト子「観光やなく、Uターン。ウチ、生まれも育ちもここなんです」
運転手「（笑顔で）そんな冗談言えるなら、安心だ。ゆっくり休んで都会に帰りなさい」
サト子「……」
　ドアが閉まり、走り去るバス。
　工場から不気味な音が聞こえて来る。
　不安な表情になるサト子。

○　山野家・表（夕）
　田舎によくある木造二階建て一軒家。
　恐る恐るサト子がやって来る。
　ドアに手をかけると、庭から物音がする。

○　同・庭（夕）
　洗濯物を取り込んでいるサト子の母、山野君枝（六十六）。
　サト子が声をかけれらずに覗いていると、視線を感じた君枝が振り向いた。
君枝「（呆然として）……」
サト子「（笑顔で）きみちゃん、ただいまっ」
君枝「なんでー」
サト子「なんでーって」
君枝「なんでなんよ？」
サト子「実家やん」
　君枝、ため息をつく。
サト子「サト子だけに、ふるさとに帰って参りました」
君枝「こっちは里子に出した気でおったのに」
サト子「きつー」
　残りの洗濯物をすばやく取り込み、君枝

は家へ入ってしまう。
取り残されるサト子。
サト子「きみちゃん……オカン……ママー」
返事はない。

○　同・居間（夕）
庶民的な和風の居間。
片隅に仏壇があり、そこには父親の遺影が飾ってある。
それに手を合わし、君枝の前に座るサト子。
サト子「（笑顔で見つめる）」
君枝「（ため息をつく）」
サト子「十回目」
君枝「なにが？」
サト子「ため息」
君枝「数えな。ずっと連絡もよこさんと」
サト子「生きとったで」
君枝「突然帰って来て、なんやの？」
サト子「サプライズやん。しかし、ここら辺は変わらんな。スーパーもタバコ屋も昔のまま。ガソリンスタンドは潰れてたわ」
君枝「ほんで、何があったん？」
サト子「芸人を辞めた。漫才コンビも解散。性格の不一致というやつやな」
君枝「せやから、あれほど……もういいわ。はよ大阪戻り」
サト子「帰って来たばっかりの人に言う？」
君枝「ほな、いつまでおるんよ？」
サト子「いつまでもー」
君枝「冗談言わんと」
サト子「それが冗談やないねん」
君枝「（開いた口が塞がらない）」
サト子「顎外れたん？」
君枝、一番大きなため息が出る。
サト子「十一回目」
君枝「（にらんで）……」
サト子「そうそう、お土産あるねん」
キャリーバックをあさり、お菓子を出す。
包装に『面白くない恋人』と書いてある。

君枝「（受け取り）何やの、これ」
サト子「北海道のお菓子で『白い恋人』ってあるやろ。あれのパロディで『面白い恋人』ってのが話題になってん。それをまたパクったんがこの『面白くない恋人』」
君枝「……」
サト子「お姉ちゃんの分もあるで」
君枝「よう許してくれたね」
サト子「何が？」
君枝「お姉ちゃんやがな」
サト子「連絡すらしてないで」
君枝「もうええ加減にしてよ。この家で揉めるのだけはやめてほしいねん」
サト子「……」
君枝が立ち上がる。
サト子「どこ行くん？」
君枝「アホ娘が帰って来たて、近所に言い回るの」
サト子「わざわざ、そんな事」
君枝「（さえぎり）先手打たんと田舎では何言われるか分からへん」
と『面白くない恋人』を持つ。
サト子「お姉ちゃんはいつ帰って来るん？」
君枝「あんたみたいに暇人やない！　黙って待っとき！」
とドアをピシャリと閉めて出ていく。
サト子、父の遺影を見つめる。

×　×　×

一時間後。
サト子と君枝が晩ご飯を食べている。
サト子「（時計を見て）遅いな」
君枝「近頃は公務員いうても色々あるみたい」
家の前で車が停まった音がする。
サト子「あっ」
君枝「どんなにどつかれても我慢するんやで。お母さんは助けられへん」
サト子「覚悟はできてる」
山野マキ（三十五）が帰って来た。
背が高く、薄化粧で地味な服装。
目つきがきつく怖そうだ。

サト子「（笑顔で）おかえりー」
マキ「（にらみつけて舌打ち）」
サト子「おいしいご飯できてるで」
マキ「玄関にアホみたいに派手な靴あるから、
　もしかしてと思ったら、やっぱりクズか」
君枝「お姉ちゃん、クズとちゃう。かわいい
　妹やで」
マキ「こんなやつ、家にあげるな」
君枝「（サト子に）あんた、ちゃんと謝り」
　土下座するサト子、マキが顔を近づける。
サト子「（固まり）……」
君枝「この子も都会で苦労したんよ」
マキ「言い訳は聞かん」
　とサト子の頭を掴む。
君枝「殺さんといて！」
マキ「あたし三十五や。暴力なんか振るわん」
君枝「（涙ぐみ）大人になったなぁ」
マキ「妹は十年前に死んだ」
サト子「え……」
マキ「（サト子の頭をポンポンと叩き）おた
　く、誰か知らんが明日には出てってや」
サト子「当分の間はお世話に」
マキ「（さえぎり）出てけよ！」
サト子「はい」
　マキ、背を向ける。
君枝「も、もうええの？」
マキ「着替えて来る」
　階段を上って行くマキ。
サト子「ヤバいかな？」
君枝「アカンなら今頃、シバかれてる。さ、
　残り食べてしまい」
サト子「はーい」
　と喜んで晩ご飯を食べ始める。
君枝「図太い子や」
　カバンを忘れたマキが戻って来る。
　食事中のサト子と目が合う。
マキ「喰うな」
サト子「え、晩ご飯？」
マキ「しゃべるな」
サト子「（苦笑いで）……」

マキ「笑うな」
サト子「……」
　マキ、にらみながら出ていく。
サト子「圧がスゲー」
君枝「看守みたいやろ」

○　同・マキの部屋（夜）
　マキが明かりをつける。
　飾り気もなく男性のような部屋。
　机に『面白くない恋人』が置いてある。
　それを見て舌打ちをする。

○　同・君枝の部屋（夜）
　布団が並んで敷いてある。
　片方にサト子が寝転んでいる。
　戸が開き、君枝が来る。
君枝「消すよ」
　と照明を薄暗くする。
君枝「明日、あんたの部屋の荷物片付ける。
　そしたら使えるようになるわ」
サト子「クーラーは？」
君枝「動くはずや」
サト子「よっしゃ」
　少し沈黙。
君枝「……どんな家で暮らしてたん？」
サト子「普通の」
君枝「普通て？」
サト子「安アパート」
君枝「大都会やった？」
サト子「そやな」
君枝「グリコの看板の近く？」
サト子「電車で二駅。そんなに気になる？」
君枝「お母さん、この村以外に住んだ事ない。
　だから、ちょっとうらやましい。仕事は忙
　しかったん？」
サト子「土日と祝は舞台。あと営業もあった」
君枝「それだけでは食べていけんやろ？」
サト子「バイトしてたよ。色々と」
君枝「……未練はない？」
サト子「ない」

君枝「舞台の興奮を一度でも味わったら、辞
　められんって聞くで」
サト子「覚せい剤みたい」
君枝「アホ」
サト子「ウチ、才能なかったから」
君枝「賞をいくつも貰ってたやん」
サト子「その程度の芸人、大阪に腐るほどお
　る」
君枝「そう。……村の人にどんな事言われも
　我慢するんやで」
サト子「大丈夫。お姉ちゃんよりえげつない
　のおらんから」
君枝「せやな。（あくびをして）おやすみ」
サト子「おやすみ」
　逆方向に寝返りを打つ君枝。
サト子「……きみちゃん」
君枝「ん？」
サト子「ごめんな」
君枝「はよ、寝なさい」
　君枝の小さな背中を見つめるサト子。

○　十津川村の風景（早朝）
　さわやかな朝。
　山にはカブトムシやクワガタが生息し、
　川は清らかに澄んで鮎が泳いでいる。

○　山野家・居間
　君枝とマキが朝ご飯を食べている。
マキ「クズはなんで起きて来うへん？」
君枝「朝八時なんか何年も起きてへんて」
マキ「いつまでおらす気？　なつかれるで」
君枝「ペットみたいに言いな」
マキ「なら、物乞いて呼ぼか？」
君枝「騙されたみたいなんよ。相方で恋人の、
　北口やなく、東口やなく、南口でもなくて」
マキ「西口。なんで一つだけ飛ばすねん」
君枝「その保証人になって借金も少しあるて。
　最初は性格の不一致とか言うて隠してたん
　やけど……」
マキ「村のもんが大失敗して帰って来よるっ

て言うてたけど、その通りになった」
君枝「……」
マキ「あいつをはよ追い出さな」
君枝「もちろん、厳しくとは思うんやけど」
マキ「やけど、なに？」
君枝「我が子やから助けてあげたいやん」
マキ「我が子なら、何があってもオトンの葬式には出るんちゃう？」
君枝「仕事で仕方なかったんよ。お通夜には一応、顔出したし」
マキ「テレビに出てる売れっ子なら、親戚にも恥かかんかったけど」
君枝「（食卓に箸を叩き置き）テレビに出んでも立派な芸人は仰山いてます！」
マキ「そんな興奮せんでも」
君枝「（鼻息荒く）……」

○　同・君枝の部屋
朝陽が差し込む部屋で、よだれを垂らし、アホ面で眠っているサト子。

○　竹本プロダクション・事務所
社員数名の弱小芸能プロダクション。
みんな出払っていて田所しかいない。
田所は昼食のカップ麺を食べながら、電話をかけ続けている。
そこに社長の竹本茂（六十一）が来る。
派手なスーツでヤクザみたいだ。
竹本「昨日、ガールズバーで喋りの達者なエロいネエちゃん二人見つけたんや」
田所「（電話をかけながら）はあ」
竹本「その子らをセクシー漫才師でデビューさせよう思てる」
田所「（電話をかけながら）はあ」
竹本「正統派芸人は大手に任せて。うちみたいな、ちっちゃいとこは企画物で勝負せな」
田所「（電話をかけながら）はあ」
竹本「お前、話聞いとらんやろ」
田所「昨日から連絡つかないんです」
竹本「誰や？」

田所「楽園さん」
竹本「楽園？」
田所「男女コンビの」
竹本「あいつら辞めたぞ」
田所「えー!?」
竹本「西口は借金まみれで飛びよった」
田所「サト子さんは？」
竹本「三日、いや四日前に電話で、そういう事やからウチも辞めますて」
田所「（驚き）……」
竹本「それより、エロネエちゃんのネタをはよ書け。もう約束してもうてるんや」
ショックのあまり言葉を失う田所。

○　スーパー『タカギ』・表
村で一軒しかない店。
店の前に自転車が一台停まっている。
少し離れたところに、中年おばちゃん三人組が井戸端会議をしている。
女１「（自転車を指さし）あれ、山野の娘が乗って来たんや。大阪で漫才師やってた下の子」
女２「男に捨てられ、カネも無くして。駆け落ちの果ては踏んだり蹴ったりか。ご苦労さんなこっちゃで」
買い物を終えたサト子が店から出て来る。
女３「オレオレ詐欺もしてたらしいで」
女２「オレオレ？」
女３「女やからウチウチか？」
女１「あんたら、聞こえるで」
女３「聞こえてもええ。ホンマの事や」
笑うおばちゃんたちと目が合うサト子。
サト子「この度、帰って参りました。これからも引き続きよろしくお願いします」
と丁寧に頭を下げる。
三人もお辞儀を返す。
サト子が自転車に乗ると、また悪口を言い始めるおばちゃんたち。
女１「なんや、偉そうやわ」
女３「ウチらをディスってるんや」

女2「ディスって？」
女3「ここらのもんを下に見てるって事」
自転車を漕ぎながら、見えない角度で舌を出し、中指を立てるサト子。

○　神社
買い袋を腕にかけ、神殿に手を合わすサト子がぶつぶつ言っている。
サト子「(小声で) 赤ちゃんがデキてませんように。あんなクソ男のはいりません。姉ちゃんに知られたら殺されるし。……あと、毎週ロト7買ってるんで当てて下さい。二等、いや三等でも結構なんで」
×　×　×
夕陽に染められた静かな境内。
ベンチで横になり、爆睡しているサト子。スーパーで買った都市伝説の本を枕にし、足元には食べ終えた弁当がある。
誰かが来て、いきなり本を引き抜いた。
後頭部を打ちつけて目を覚ますサト子。
サト子「痛っ。うわっ！」
目の前にマキが立っていた。
マキ「アホ！　こんなとこをおばはんらに見られたら、何言われるか分からんぞ」
サト子「……」
マキ「知り合いの人が『妹さんが神社におった』て教えてくれたんや」
サト子「ええ人に見つけて貰って助かったな」
マキ「どアホ！」
と去っていく。

○　山野家・居間（夜）
サト子、君枝、マキが黙々と晩ご飯を食べている。
君枝「……家族全員で食事なんて十年ぶりや」
マキ「オトンおらん」
サト子「(遺影を見て) あそこにおる」
マキ「(にらむ)」
君枝「サト子、工場で働かへん？　今、ちょうど人足りんでな」

サト子「えー。きみちゃんと一緒やろ」
マキ「わがまま言うな。働けゴミクズ」
サト子「親子でって、照れるやん」
君枝「田舎では仕事選ばれへんよ」
サト子「不景気やもんなぁ。やっぱり日本の政治が悪いんや。トップがアホやと地方はどんどんアカンなっていく」
マキ「一番アカンのはお前じゃ」
サト子「その点、お姉ちゃんは公務員やから国が守ってくれるもんな」
マキ「アホか。あたしは役場。国とちゃう、村の犬や」
サト子「犬……」
マキ「無職がクーラーきいた部屋で過ごして、三食たらふく喰うて、昼からブラブラして、外で昼寝までされたらメーワクなんじゃ」
サト子「(嫌味に) お姉ちゃんは高校卒業して、ずーっとずーっと働いて偉いねぇ」
マキ「どういう意味や？」
サト子「言葉のまんまやけど」
マキ「言いたい事あるなら、はっきり言うてみぃ」
サト子「嫁に行かんとご立派やわ」
マキ「その口、二度と喋れんようにしたろか」
サト子「お姉ちゃんこそ、黙って」
マキ「なんやと！　お前みたいなクソガキは」
君枝「(さえぎり) ええ加減にして！　仲良くできんなら二人とも出てってー！」
黙ったままにらみ合うサト子とマキ。

○　同・サト子の部屋（夜）
勉強机だけがある部屋。
サト子と君枝が荷物の入った段ボールを隅に寄せている。
サト子「あとは自分でできる」
君枝「ほな、お母さんいくで。クーラーはタイマーして寝てや」
ドアの前で立ち止まる君枝。
サト子「ん？」
君枝「あんたは出戻りやねんから肩身が狭い

んは仕方ないんやで」
サト子「分かってる」
君枝、去っていく。
サト子はキャリーバックの荷解きを始める、陽性になった妊娠検査薬が出て来る。
ゴミ箱に捨てる、次は手帳が十数冊も出て来た。
サト子「（捨てようか迷い）……」

○　エレクトロ工場・表
築三十年の古い工場。
大きな音を立て、煙突からもうもうと煙を出している。

○　同・工場内
コンベアの騒音の中、流れてきた部品を組み合わせる作業が行われている。
パートのおばちゃん十人が、白の作業着に帽子とマスクをつけて働いている。
一人だけ動きの鈍いサト子、何度も間違い焦っている。
副工場長の大久保雅一（四十二）が助けに来る。
背は低くく太っていて、顔も良くない。
大久保「慌てず最初はゆっくりでいいから」
サト子「は、はい」
大久保「欠品を出さないよう、正確さを一番にね」
うなずくが苦戦しているサト子。
大久保が見本を見せる。
大久保「左手でこっちの部品を持って固定して、右手でこう持って来て、こうです」
真似をするとサト子にもできた。
大久保「その調子！　その調子！」
と満面の笑みでサト子の肩を叩く。
サト子「痛い、痛いです」

○　同・食堂
従業員の昼食時間。
サト子はカレーを食べている。

君枝はパンをかじっている。
サト子「それだけやったらお腹減らん？」
君枝「食堂のマズいんよ。カレーはまだマシやわ」
サト子「ウチらって何作ってるん？」
君枝「インフォニックソード」
サト子「何それ？」
君枝「なんやろね」
サト子「分からんと組み立ててるん？」
君枝「誰も気にしてへんもん」
サト子「マジで」
周りを見るとペチャクチャ喋り、楽しそうに食事をしているおばちゃんたち。
君枝「あっ、柳本さんが百均の部品にも使われるて言うてたわ」
サト子「柳本さん？」
君枝「前の副工場長。すい臓がんで去年亡くなりはってな。ホンマ、ええ人やったで」
サト子「百均の何？」
君枝「忘れた」
サト子「えー」
そこにマキがやって来る。
君枝「どうしたん、珍しい」
マキ「サト子が尻尾巻いて逃げてへんか見に来た」
サト子「心配してくれたん？」
マキ「監視じゃ」
サト子「ここの工場長が優しいから余裕余裕」
君枝「大久保さんは副工場長やで」
サト子「間違っても怒らんし、丁寧に教えてくれはる」
マキ「（嬉しそうに）ほう」
サト子「ウチの事、好きなんかも。めちゃくちゃカラダ触って来るし」
マキ「……」
サト子「でもチビでデブで、帽子取ったらハゲとった。金積まれても無理」
マキ「……」
サト子「あと口も臭いねん。あれはヤバい。体臭もえげつないやろな」

マキの表情が引きつり、君枝は完全に固まる。
大久保の声「マキさーん」
振り返ると少し離れて大久保がいた。
駆け寄るマキ、仲良さげに話し出す。
サト子「うそー」
君枝「あんたはアホなんやから」
サト子「そういう事は先言うてーや」
君枝「ゆくゆくは結婚もあるかもて」
サト子「ガチ？」
うなずく君枝。
サト子「(大久保を見ながら) よく見たら味のある顔、照英みたい。声もイケボやし」
君枝「今頃言うても手遅れやわ」

○　同・駐輪場
従業員たちが帰っていく。
サト子と君枝も帰宅のため自転車に乗る。
工場の外に赤ちゃんを抱っこしたお母さんが通る。
じっと見るサト子、それに気付く君枝。
君枝「あんた、まさか！」
サト子「(焦って) な、なに？」
君枝「誘拐しようて思てるんか？」
サト子「何言うてるん。用事を思い出したから先帰ってて」
君枝「すぐ終わるなら待っとくで」
サト子「スーパーも寄るし」
君枝「今日はあんたの好きな唐揚げやから、はやなるで帰って来るんやで」
サト子「なるはやな」

○　同・事務所への廊下
キョロキョロして迷っているサト子。
制服姿の片岡萌 (二十九) が歩いて来た。
サト子、しまったと思い、引き返そうとするが萌が手を振って走って来る。
萌　「せんぱーい、先輩じゃないですか。帰って来たって聞いて、ずっと会いたかったんですよー」

サト子「あ、萌ちゃん。久しぶり」
萌　「今、ここで正社員してます。制服、クソダサいから恥ずかしい」
サト子「そ」
萌　「なんか冷たくないですかー。今度、飲みに行きましょうよ、飲みに」
サト子「……」
　遠くで男性社員が待っている。
萌　「（指さし）萌、彼と結婚するんですー。新婚旅行はパリ。たった一週間だけど」
サト子「へー」
萌　「詳しく聞きたいですよね？　電話します。あ、番号変わりました？」
サト子「同じ」
萌　「じゃ、明日かけますからー」
　萌はヒールを響かせ、男性のところへ駆けていく。
サト子「マウント取りやがって、どブスめ」
　とスマホを出し、『萌』を着信拒否する。

○　同・事務所
　西日が差し込む時間。
　ハゲ頭に汗をかき、パソコンに向かっている大久保。
　恐る恐るサト子が入って来る。
サト子「あの～」
大久保「何かありましたか？」
サト子「うちの姉と……あれですよね？」
大久保「マキさんとお付き合いさせて頂いてます」
サト子「お姉ちゃんは怒ったら怖いけど……ホンマはホンマは優しい人なんです。だから幸せにしてやって下さい」
　と頭を下げる。
　立ち上がる大久保。
大久保「（頭を下げ）こちらこそ」
サト子「ウチは村の恥さらしですみません」
大久保「私は元々、関東の人間なので何とも思っておりません」
サト子「のちのち、こんな身内がおると知っ

たら申しわけないので挨拶に来ました」
大久保「お義母さんから聞いてます」
サト子「それは良かった。では失礼します」
大久保「あっ。体臭はきつくないです」
サト子「え？」
大久保「仰っていたとお聞きしました」
サト子「そ、そ、それは」
大久保「口臭は昨日、にんにくましまし餃子を食べたんです。ご迷惑おかけました」
サト子「いえいえいえいえ」
大久保「チビでデブでハゲは事実ですが」
サト子「本当に申し訳ありませんでしたー」
と慌てて出ていく。
にこやかに見送る大久保。

○　山野家・表（夜）
怪しい男が家を覗き込んでいる。
そこへマキが帰って来た。
男に気付き、後ずさりする。

○　同・居間（夜）
サト子と君枝が真っ赤なアイスキャンディーを食べながら喋っている。
サト子「あの顔で四十二歳？」
君枝「ビックリマンやろ」
サト子「古っ」
二人の口はキャンディーで赤く染まっている。
サト子「オトン、これ食べて『ドラキュラやー』ってふざけてたな」
君枝「今年からはあんたがやったら？」
サト子「元芸人がつまらん事できん」
君枝「あの人、笑いのセンスはなかったわ」
その時、表から男の叫び声が聞こえる。
サト子と君枝が顔を見合わせる。

○　同・表（夜）
マキがバットを持ち、男に馬乗りになっている。
慌てて駆けつけるサト子と君枝。

マキ「泥棒捕まえたぞ」
　サト子が男の顔を見る、田所だった。
サト子「ドロボーちゃうし！」

○　同・居間（夜）
　氷で頭を冷やしている田所。
　君枝は平身低頭で謝っている。
　しかしマキは知らん顔。
　サト子は少しだけ申し訳なさそう。
君枝「本当にすみませんでした」
田所「私が悪いんです。完全に不審者でした」
君枝「それでもバットで頭を殴るんは」
田所「蹴りと関節技も決められました」
サト子「お姉ちゃんは極真空手二段、柔道黒
　帯の霊長類最強女子やから」
マキ「余計な事言うな」
君枝「あんたも謝り」
　とマキの頭を無理やり下げさせる。
サト子「で、何しに来たん。こんな山奥まで」
田所「確かに驚きました。大阪から三時間」
サト子「三時間半な」
田所「実家の方が近いですよ」
サト子「だから用件は？」
田所「説得です」
サト子「説得？」
田所「芸人に復帰しませんか？」
サト子「……」
君枝「……」
マキ「……」
田所「ボクはサト子さんの漫才に惚れ、うち
　の事務所に入社しました。一流の芸人さん
　になって頂くために頑張って来たんです」
　黙って聞いている一同。
田所「サト子さんがいない、これからのお笑
　い界なんて考えられません。是非、考え直
　してください。お願いします」
　君枝とマキの表情が強張る。
サト子「もうやる気はないねん」
田所「でも」
サト子「はっきり決めたんやって」

田所「しかし」
サト子「でもも、しかしもない」
田所「しゃべくりで爆笑を取れる女芸人は他にいません。こんな田舎に埋もれてたら、もったいないです」
マキ「アカンのか」
田所「へ？」
マキ「ここにおったら、そんなにアカンのかって」
田所「そういう意味じゃ」
マキ「妹はきっぱり諦めた」
田所「けど」
マキ「けどもクソもない。悪の道に引きずり込むのはやめろ」
田所「悪の道……」
マキ「冗談ちゃうで。何百人、何千人も挑戦して成功するのはわずかな世界や」
田所「もちろん分かってます」
マキ「才能があっても難しい。五年、十年やって売れんかったらどうする？」
田所「その先も一緒に頑張って」
マキ「（さえぎり）結婚もできん、子供もおらん女が失敗しました。では取り返しつかんぞ。責任取れるんか？」
田所「責任……なんとかします」
マキ「終わった女の責任を取れるわけない！」
君枝「マキ、それぐらいにしとき」
マキ「あたし間違ってる？」
君枝「言うてる通りや。それはサト子も充分分かってる。だから帰って来たんや。（サト子に）な？」
サト子「……うん」
シンとなる室内。
田所「お話は承知しました。ご迷惑おかけしてすみませんでした」
と頭を下げて、立ちあがる。
君枝「もうないから」
田所「二度と来るなと？」
君枝「そうやなくて、帰りのバスも電車もあらへん」

田所「（時計を見て）まだ九時半ですが」
サト子「もう九時半や」

○　同・風呂（夜）
　田所が湯船に浸かっている。
　外に君枝が来る。
君枝の声「バスタオル置いときます」
田所「すみません」
君枝の声「色々と失礼な事を申しました」
田所「いえいえ」
　じっと動かない君枝。
田所「どうかなさいました？」
君枝の声「ここへはもう来ないでくださいね」
田所「……」
　君枝、行ってしまう。
　田所は湯で顔をゴシゴシ洗う。
田所「あー！」

○　同・君枝の部屋（夜）
　薄暗い中、サト子と君枝が寝ている。
　スーッと戸が開き、マキが顔を出す。
　二人が眠っているを確認し、何も言わず去る。
　少しして苦しそうに寝返りを打つ君枝。
　それを薄目を開けて見ているサト子。
　二人もなかなか寝付けない。

○　同・サト子の部屋（夜）
　うちわを扇ぎながら、布団の上に座っている田所。
　スマホを出し、ユーチューブを見ようとするが電波状況が悪く何度も止まる。
　やる事もなく、サト子の机の引き出しを開ける。手帳が十数冊入っていた。
　捲ると漫才の台本が書かれていた。
　赤字でたくさんの書き込みもしてある。
　全ての手帳がそうなっていた。
田所「（真剣に見て）……」

○　バス停・エレクトロ工場前（早朝）

朝もや、始発を待つサト子と田所。
サト子「……ウチ、待ってたんかも」
田所「ボクをですか！」
サト子「ちゃう、あいつを」
田所「西口さんか……」
サト子「芸人としても、男としても」
田所「男として？」
サト子「妊娠してるかもしれん」
田所「えー!? 西口さんの？ 知らせたんですか？ 生むんですか？ ど、ど、どうするんです？」
サト子「かもやで。一か月遅れる事なんてよくあるし。今回も大丈夫ちゃうか」
田所「一応、病院へ行かれた方が」
サト子「相方、いや元相方から連絡は？」
田所「いえ」
サト子「やっぱり」
田所「(思いつき) そうか、西口さんさえ見つけて来たら」
サト子「もう待ってへん」
少し間がある。
田所「……どこが好きだったんです？」
サト子「それはちゃんと答えた方がいい？」
田所「お願いします」
サト子「大学一年の時にバイト先で知り合ってんけど。会った日、ウチが車のカギを側溝に落としてな」
田所「道路の？」
サト子「うん。汚いとこで躊躇してたら、あいつが手を突っ込んで取ってくれた。それで一発で好きになってもうて」
田所「それだけで？」
サト子「手を洗えば済む事やけど、そういうのって中々できんもんやで。でも十年後、ウチの財布に手を突っ込むとは予想してへんかった」
田所「……時間が経ったら戻って来られるかもしれません」
サト子「それはない。厳しさを知ってるから」
田所「厳しさ？」

サト子「新ネタ作って、稽古して稽古して、
舞台にかけて、ウケんから直して直して、
やっとカタチになったら客に飽きられて。
また新しいのを作る」
田所「その繰り返し」
サト子「苦しいし、辛いし、しんどいし、ギャラ安いし、ゴールは見えへんし」
田所「厳しい世界です」
サト子「それ経験してるから簡単には帰って来ん。それがイヤで逃げたんかもな」
田所「普通の生活に戻りたくなって？」
曖昧にうなずくサト子。
サト子「ウチも逃げてた。辞める前の漫才は小手先になって。田所さんが面白かったって言うてくれたアドリブな」
田所「漫才が終わらないやつですね」
サト子「あれ、全部台本通り。正攻法でアカンから、卑怯な手を使ってたんや」
田所「ウケてたから、いいじゃないですか」
サト子「売れるためにやり方を変えへんて言うたのもホンマは変えられへんだけやった」
田所「……」
サト子「相方を理由にしてたけど、偉い人に頭下げたりお酌もしたくなかった。必死さ貪欲さが成功した連中に負けてた」
田所「今度はピンでやりません？　誰の責任にもできない。サト子さんの実力が試せます。相方さんが邪魔だったんですよ」
サト子「……」
田所「余計な事言って、すみません」
サト子「ピン芸人か。そんな怖い事できんわ」
田所「……西口さんを探してみます。だから、もう一度だけ頑張ってみましょう」
サト子「……」
田所「会社も辞めて、私が個人事務所を作ります。そこで勝負しませんか？」
サト子がふき出す。
田所「真面目にですよ」
サト子「真面目って何？」
田所「真面目は……本気です」

サト子「本気って、ウチは行動やと思うねん。
口だけやなく」
田所「ボクは口だけの男じゃない！」
サト子「会社辞めてないやん」
田所「それは」
サト子「個人事務所はどこに作るん？　いつから？　会社名は？」
田所「……」
サト子「行動が伴わんのはイキってるだけ。
ウチは本気で芸人やったよ」
田所「はい」
サト子「でもチャンスを何度も逃した。売れたやつはワンチャンで掴みよる。目の前で何度も見てきた」
田所「だから、次こそ」
サト子「それにな、お笑いの世界は女には物凄くハンデあるねん」
田所「生理とか？」
サト子「肉体的な事やない。下ネタ言うたら、女がそこまでせんでもとか、下品やとか」
田所「そういうのは気にしてないのかと」
サト子「相方とネタでぶつかった時も、最終的にはこっちが引いた。男を立てたらなと思ってな。夜はあそこを立ててたけど」
田所「……」
サト子「笑いーや。てか、あんたは凄い。仕事とはいえ、こんなとこまで来るんやもん」
田所「そこまでさせてしまうサト子さんが凄いんですよ」
サト子「潔く諦め」
田所「……」
サト子「(周りを見て) テレビのレギュラーいっぱいあって、ＣＭめっちゃ出て、ギャラも死ぬほど貰って。成功するまでは帰らんって覚悟しててんけどなぁ」
バスがやって来た、ドアが開く。
サト子「ありがとう。ほな、気ぃ付けてな」
田所、何も言わずに乗り込む。
行ってしまうバス、黙って見送るサト子。

○　山野家・台所
　朝食の支度をする君枝、後ろにマキが立っている。
マキ「なんで見送りなんか行かせた」
君枝「礼儀やん。お世話になった方がわざわざいらしたんやから」
マキ「一緒に行っても知らんで」
君枝「荷物持ってへんかった」
マキ「映画みたいにそのままとかある」
君枝「ダスティンホフマンの卒業？　あれ、良かったわ。最後の結婚式のとこなんか」
マキ「そんなん言うてんのちゃう！」
　サト子が帰って来た音がする。
君枝「ほら」
　マキ、そそくさと居間にいく。
サト子の声「休みやのに、珍しく早起きやん」
マキの声「やかましい！」
サト子の声「怖っ」
　笑う君枝。

○　サト子の夢
　大きな劇場でフラッシュを浴びているサト子と西口。
　二人は漫才の賞レースに優勝し、賞状を広げて満面の笑み浮かべている。

○　山野家・居間
　仏壇周りに生花や果物、提灯などお盆の用意がされている。
　食卓には朝ご飯が一人分置いてある。
　部屋の隅で、うたた寝していたサト子を君枝が叩いて起こす。
サト子「（寝ぼけまなこで）何分寝てた？」
君枝「三十分。あんたも食べてしまい」
サト子「うん……」
君枝「アホみたいにニヤニヤしてたけど、どんなええ夢見たん？」
サト子「悪夢や」

○　同・風呂

腕まくりをし、泡まみれになって掃除しているサト子と君枝。
サト子「きみちゃんがキューピットやん。お見合いまでセッティングして」
君枝「そんな堅苦しいもんやない。紹介しただけや。（小声で）見た目はあれやけど性格はええから。男はここやで」
と胸を叩く。
サト子「おっぱい？」
君枝「（うなずき）そうそうDカップはある、ってアホ。でも孫がブスなるんはイヤやわ」
サト子「なら、男産んでもらお」
君枝「男でも顔はいるで。整形とかどやろ？」
サト子「芸能人、みんなやってるしな」
君枝「やっぱりそうなん？」
ガラッとドアが開き、マキが顔を出す。
マキ「そろそろ行くから」
サト子・君枝「（引きつり笑顔で）行ってらっしゃい」
マキ「？」
不審に思いながらも立ち去るマキ。
サト子「聞こえてたかな？」
君枝「デートの支度でそれどころやないわ」
サト子「昨日から、ずっとにやけてた」
君枝「あの子、案外顔に出るんよ」
怖い顔をしたマキが戻って来た。
マキ「いらん事、教えな」
君枝「すみません」

○　走る車・車内
運転しているマキ、助手席には大久保。
大久保「サト子ちゃんは素直でいい子だね」
マキ「アホなだけ」
大久保「なんか不思議な魅力があるんだなぁ」
マキ「……」
大久保「ああ、変な意味じゃないよ」
マキ「分かってる」
大久保「でも時々、さびしそうにも見える」
黙り込むマキ。
大久保「ごめん。気分悪くした？」

マキ「ううん。あの子、小さい頃から運動も
勉強もあたしよりできた」
大久保「へえ」
マキ「その上、愛嬌もあるから誰からも好か
れるタイプの人間やった」
大久保「人気者で家族としても鼻が高い」
マキ「オトンはみんなが呆れるくらいサト子
びいきでな、いつも家族の中心。その嫉妬
は未だにある」
大久保「……そうなんだ」
マキ「妹が県立大に合格した時、実家から通
えるようにって車を買った。家、貧乏やの
に」
大久保「結局、大学は辞めたんだよね？」
マキ「二年の秋。突然、男と組んで漫才師な
るて言い出して」
大久保「みんなビックリだ」
マキ「家族は必死に止めたけど、翌日にはお
らんなってた。残ったのはこの車とローン
だけ」
大久保「こんな村だと、駆け落ちなんてした
ら色々と大変だろうね」
マキ「(うなずき) 一番腹立ったんはオトン」
大久保「どうして？」
マキ「あの子を応援したから」
大久保「そりゃ、かわいい娘だもの」
マキ「頼まれてもないのに、テレビ出演があ
ったら一か月も前から近所に宣伝して回っ
て。恥ずかしいやら情けないやらで」
大久保「……」
マキ「病気で倒れても『サト子に知らせるな。
今、あいつの正念場や』って」
大久保「親とはそういうものだよ」
マキ「ううん、あの子には特別」
大久保「マキさんでも同じようにしたと思う」
マキ「あんたに何が分かるん」
大久保「分かるよ」
マキ「バツイチやけど子供おらんかったくせ
に」
大久保「……」

マキ「ごめん、言い過ぎた」
大久保「ううん」
沈黙する車内。

○　墓地（夕）
山野家のお墓を掃除するサト子と君枝。
そこにデート帰りのマキがやって来た。
サト子「あれ、早いやん」
君枝「無理せんでも良かったのに」
マキ「お盆くらいは墓参りしな」
三人が墓に手を合わす。
マキ「明後日の夜、二人とも家におって」
サト子「なんで？」
マキ「ええから」
サト子「ええからって、なんで？」
マキ「……」
君枝「副工場長が来るんか？」
マキ、恥ずかしそうにうなずく。
サト子「もしかしてプロポーズされた？」
顔を真っ赤にするマキ。
サト子「あいつ、やるやん」
君枝「お義兄さんて言い。あっ、お父さんにも報告せな」
と手を合わせ、ぶつぶつ言い出す。
まだ顔の赤いマキ、それを見てニヤニヤするサト子。

○　エレクトロ工場・工場内
流れ作業をするパートのおばちゃんたち。
サト子も慣れた手つきでこなしている。
隣に大久保がやって来る。
サト子「家、来るんですよね？」
大久保「大丈夫かな？」
サト子「プロポーズ、オッケーちゃうん？」
大久保「いや、お義母さんの方」
サト子「きみちゃん？」

○　同・食堂
サト子と大久保がカレーを食べながら、話をしている。

大久保「お正月と去年の今頃にも倒れてね」
サト子「高血圧で？」
大久保「（うなずき）大きい病院で一度診て貰いましょうと誘ったけどダメで。サト子ちゃんからもさり気なく言ってくれない？」
サト子「ああ見えて一番頑固やから。ま、お姉ちゃんおるし、これからは副工場長も」
大久保「その事なんだけど、実は」
君枝がやって来る。
大久保「（サト子に）じゃあ、そういう事で。（君枝に）今夜はよろしくお願い致します」と去っていく。
君枝「相変わらず真面目。こっちが緊張するわ」
袋からパンを出して食べ始める君枝。
サト子「毎日、それやと病気なるで！」
君枝「急になんやの？」
サト子「ランチパックばっかり食べて」
君枝「色んな味あるで」
サト子「そんなん聞いてへん」
君枝「朝晩はきっちり食べてるから大丈夫や」
サト子「それやったらええけど……」
とバクバクとカレーを食べる。
それを不思議そうに見る君枝。

○　山野家・居間（夜）
サト子と君枝とマキが、豪勢な料理を忙しそうに運び込んでいる。
玄関のドアが開いた音がする。
大久保の声「ごめんください」
君枝「あがってー」
現れた大久保は高級スーツを着て、眉毛や鼻毛を整え、髪も完璧にセットしている。
呆然と見る三人。
大久保「おかしいですか？」
君枝「めっちゃイケメン」
サト子「うん、副工場長にも衣裳や」
マキ「……」
大久保「（マキに）どうかな？」

マキ「（見惚れて）まあまあや」
×　×　×
食事が終わり、サト子と君枝とマキが談笑していると大久保が突然の土下座。
大久保「お義母さんっ！」
サト子「このタイミング？」
大久保「（顔をあげ）もう少しあとでしたか」
とやめようとするが。
サト子「あ、もうやっちゃいましょ」
大久保「はい、では。（頭をさげ）お義母さん、マキさんをわ、わ、私に……ください」
緊張感のある間。
君枝「あげるー」
ズッコケる一同。
君枝「え、なんて答えたら良かったん？」
サト子「ふつつかな娘ですけど」
君枝「（頭を下げ）ふつつかな娘ですけど、副工場長よろしくお願いします」
サト子「名前で呼び。ホンマ、天然やわ」
みんな笑うが、マキの目は潤んでいる。

○　同・サト子の部屋（夜）
スマホゲームをしているサト子。
床には数本の空のビール缶が並んでいる。
サト子「（ゲームに）クッソー、意地でも課金せんぞ」
マキが入って来る、だが黙っている。
サト子「（ビール缶を開け）なに？」
マキ「飲みすぎ」
サト子「めでたい日やん」
マキ「……」
サト子「で？」
マキ「任してええか？」
サト子「何を？」
マキ「オカン」
サト子「（ゲームに）あー、またやられた」
マキ「元気そうに見えても、今年六十七。三年したら七十歳」
サト子「そんないってた」
マキ「立派な高齢者」

サト子「コーレイシャって、もうすぐ死にますって感じやな」
マキ「そんなキレイごとやない。これからいっぱい病気なって、介護も必要なって、周りにめっちゃ迷惑かけるって事や」
サト子「長生きはしたない」
マキ、サト子のスマホを奪う。
マキ「真面目に聞け」
サト子「聞いてる」
マキ「なら、答え。お姉ちゃんが言いたいの」
サト子「カラダの弱いきみちゃんの面倒を見ろ。あたしは副工場長とこの村を出ていく」
マキ「あの人から聞いたん？」
サト子「はっきりやないけど」

○　同・サト子の部屋の前（夜）
会話を聞いてしまい部屋に入れない君枝、盆に載せたスイカが揺れている。
サト子の声「結婚が急に決まったんなんで？きみちゃんを押し付けられるから？」
マキの声「そんな自己中ちゃうわ」
君枝、動けない。

○　同・サト子の部屋（夜）
サト子、マキからスマホを奪い返してゲームを再開する。
しばらくゲーム音だけが聞こえる。
マキ「さっきオカンがな、孫生まれたら賑やかで楽しいやろうなって笑ってた」
サト子「高齢者に残酷な夢見せて」
マキが出て行こうと戸を開ける。
そこに君枝はいなかった。
サト子「指輪は？」
マキ「（振り返らず）まだ」
サト子「転勤先で、ティファニーやカルティエ買うんか。しっかりしてるわ」
マキ「そういう事やから、よろしく」
行ってしまうマキ。
サト子「全然、よろしない」
とビールをグビグビと飲み切る。

○　通天閣演芸ホール・場内（夜）
舞台上に露出度の高い衣装を着た女性コンビが漫才をしている。
素人のようなしゃべりだがウケている。
女性コンビ名の入ったTシャツを着たり、うちわを振ったりといつもと違う客層だ。
漫才が終わり二人が舞台を去ると、ファンたちも一斉に帰る。
歯抜けのようになった客席。
それを冷たい目で眺める田所。

○　同・表（夜）
女性コンビをタクシーに乗せる、竹本。
竹本「テレビの準レギュラーも決まったよって気張ってや」
女性コンビ１「毎回、衣装変えてな」
女性コンビ２「スタイリストもつけてや」
竹本「（揉み手で）もちろんでんがな」
ドアが閉まり、タクシーが去っていく。
そこへ田所がやって来る。
竹本「エロネエちゃんらのおかげで、チケット完売。物販も最高記録やで」
田所「おめでとうございます」
竹本「ほんでな、ファンだけやなくスポンサーまで連れて来よる。こりゃ、儲かるで！」
田所「はあ」
竹本「次はホスト漫才師を考えてる。目ぇつけてるのおるから、今から唾つけに行くぞ」
田所「セクシー漫才師、ホスト漫才師……」
竹本「おお、ゼニの匂いがせぇへんか？　とりあえず、店に急ぐど」
田所「イヤです」
竹本「社長命令やぞ」
田所「もう台本も書きません」
竹本「そんな事したらクビや、クビー！」
田所「クビで結構！」
と行ってしまう。
竹本「ウソ、ウソウソ。あんたがおらんなったら会社回らん」

振り返らずズンズン歩いていく田所。
竹本「給料もボーナスもバンバンだす。風俗も奢る。お願い、助けて。田所ちゃ～ん」
と追いかける。

○　山野家・サト子の部屋
朝、布団の上でお腹をさすってうずくまっているサト子。
部屋の前に君枝が来て、話しかける。
君枝の声「診察終わったら連絡してや」
サト子「……」
君枝の声「返事は？」
サト子「分かってる。しつこい」
君枝の声「あんたがちゃんと答えへんから」
去っていく君枝。
サト子「サイアク、めまいまでしてきた」
と布団に潜る。

○　道
あぜ道を自転車で並走する君枝とマキ。
二台ともハンドルに日傘を挿している。
マキ「ただの二日酔いに何で車貸さなアカン。弱いのに飲み過ぎるのオトンそっくりや」
君枝「病院嫌いのあの子が行くて言うねんで。お酒もこっち帰って来て、飲んでなかった。あんたの結婚が嬉しくて失敗したんやで」
マキ「……最悪、日焼け止め塗るの忘れた」
君枝「あっ！」
マキ「オカンも？」
君枝「二日酔いて、飲酒運転ならへん？」
マキ「なるわけない」
一瞬の沈黙。
マキ「やっぱアカンかも」
君枝「えー」

○　五十嵐診療所・診察室
不安そうな顔で座っているサト子。
医師の五十嵐清（七十五）は難しい表情で何かを見つめている、妊娠検査薬だ。
五十嵐「（パッと笑顔になり）おめでとう！」

サト子「はあ？」
五十嵐「ご懐妊」
サト子「ホンマに？」
五十嵐「ホンマや」
サト子「マジかー」
五十嵐「マジやー」
サト子「先生、ふざけんといてください」
五十嵐「めでたくないか」
サト子「全然」
五十嵐「まあ、確定やないけど二度目やろ？
　婦人科でちゃんと診てもらい」
　思い出しながら指折り数えるサト子。
五十嵐「どや、計算合うか？」
　サト子、不満そうにうなずく。
五十嵐「まあ、ゆっくり考え。だが、あんた
　が帰って来てひと安心やで」
サト子「へ？」
五十嵐「お母さんや。姉ちゃんは結婚してお
　らんなるやろ」
サト子「先生まで知ってるんですか？」
五十嵐「ど田舎は噂話しか楽しみない。独居
　ならんで良かったで」
サト子「そんなに悪いんですか、高血圧」
五十嵐「そっちは薬で抑えられる」
サト子「そっち？」
五十嵐「心臓の方は聞いてないんか？」
サト子「詳しく教えてください」
五十嵐「いやぁ、個人情報になるさかいなぁ」
サト子「家族に個人情報もクソも」
五十嵐「クソて。……お母さん、心臓弁膜症
　言うてな」
サト子「ベンマクショー？」
五十嵐「簡単に言うたら、加齢で心臓の機能
　が低下してるんや」
サト子「手術できへんのですか？」
五十嵐「基礎疾患あるやろ」
サト子「高血圧と不整脈」
五十嵐「糖尿も少し。リスクあるが、した方
　がええ。病院も紹介したるて言うたが」
サト子「断った」

五十嵐「せや」
サト子「先生言うても無理かー。ほっといたらどうなるんです？」
五十嵐「少しずつ衰えていって。最後はチーン。最近、息切れとかしてへんか？」
サト子「してないと思う」
五十嵐「なら、調子はええんやな。それより今は自分の事でっせ」
サト子「……」

○　走る車・車内
サト子が運転していると、着信音が鳴る。
画面を見ると『西口』だ。
慌てて車を止めて電話に出る。
西口の声「今、大丈夫か？」
サト子「貸したお金返してくれるん？　わざわざ電話せんでも振り込んだら良かったのに。口座番号分からんならメールしよか」
西口の声「それやない。大事な話や」
サト子「金より大事な話なんかある？」
西口の声「ある。芸人を続けてほしい」
サト子「よう言うわ」
西口の声「こんな事になって悪かったと思ってる。でも、お笑い芸人はサト子の天職や。お前は超一流なんやで。十年横におったから保障する。人を見る目はあるねん」
サト子「女の趣味、クソ悪いけど」
西口の声「真面目に言うてるねん。逃げるな」
サト子「逃げたんあんたやろ」
西口の声「俺が足引っ張ってたのに、漫才はそこそこウケてた。ピンなったら爆笑取れるぞ」
サト子「そんな単純なもんやない」
西口の声「復帰、楽しみにしてるから」
サト子「腹立つわぁ」
少し間がある。
西口の声「そっちは何か変わった事あった？」
サト子「……何もない。話はそれだけ？」
西口の声「おお」
サト子「なら、切るで」

と切る、そして電源も落とす。
シートを倒して目をつむるサト子。

○ パチンコ店・駐車場
パチンコ店の制服姿の西口がスマホ片手に男と喋っている。
西口「迫真の演技やろ？　俺、俳優になるべきやったな」
男が顔をあげた、田所だった。
田所「完璧です」
と封筒を渡す。
西口が中を確認する、万札が数枚ある。
田所「あの女性とは、その後？」
西口「キャバ嬢か。あいつ、他にも男いっぱいおって誰の子か調べるの大変やったで」
田所「じゃあ？」
西口「ああ、ちゃうかった」
田所「なら、サト子さんともう一度」
西口「（首を左右に振り）また簡単に稼げる事あったら頼むわ」
と店の方に歩いていく。
後ろ姿をにらみつける田所。

○ 十津川
近くに車を停めたサト子が歩いて来る。
頭上には木製のつり橋がかかっている。
地面に座って川を眺める。
川面に陽射しがあたり、ピカピカと光ってまるで舞台のライトようだ。
流れる音は客の笑い声に聞こえて来る。

○ サト子のイメージ
演芸ホール。満杯の客の前で、サト子と西口が漫才をしている。
大いにウケ、袖の田所と竹本も満足そう。
まぶしい照明、観客の笑い声、サト子は体全体で受け止めている。

○ 十津川
サト子、川を背にして歩いていく。

頬には涙が流れていた。
それを見ていた中年三人組。
女１「泣いてたわ。メンヘラいうやつやな。
ああいう子は、男に自殺するて脅すんやで」
女２「都会でもやったに違いない」
女１「かまってちゃんは、ほっとこ」
女３「でもホンマに死なれたらかなんで」
女１・２「ホンマやわ～」
女３「みんなに言い回ろ」
うなずくおばちゃんたち。

○　エレクトロ工場・表（夕）
君枝が待っていると、マキが立ち漕ぎでやって来る。
マキ「家におらん。車もないまま」
君枝「病院の方はすぐに終わったみたい」
マキ「何の病気やったん？」
君枝「カラダは元気そのもの。やけど……」
マキ「やけど？」
そこへ車に乗った大久保が来る。
大久保「（窓から顔を出し）サト子ちゃんを川で見かけたって」
君枝・マキ「川！」

○　山野家への道（夜）
君枝とマキと大久保が歩いて来る。
大久保「いつから連絡着きません？」
君枝「お昼。何度も電話したけどアカンわ」
大久保「他に心当たりは？」
マキ「一番ありえるのはあたしが色々言うたから、それがイヤでまた逃げ出した」
君枝「それやったら別にええ」
マキ「ええ事ない。甘すぎる」
君枝「元気ならかまへん」
マキ「なんでかまへんねん！　また、みんなに何言われるか分からんで」
君枝「世間体なんか気にしたらアカン。人生は一回こっきりや」
マキ「芸人なるって時代遅れの駆け落ちされた時、どんだけ恥ずかしい思いしたか」

君枝「お母さんはうらやましくも思ったで」
マキ「何ちゅう事言い出すんや！」
大久保「まあまあ、今は揉めてる場合じゃ」
　山野家を覗く怪しい男がいる。
大久保「不審者！」
　とタックルして倒し、押さえつける。
　男は田所だった。
田所「痛い痛い」
君枝・マキ「またや」

○　山野家・居間（夜）
　君枝と田所が向かい合っている。
君枝「今日のところは帰って頂いた方が」
田所「聞いてしまった以上、元気な姿を一目
　見るまでは」
君枝「見つかったら連絡させますんで」
田所「電話もメールもＬＩＮＥもズームもス
　カイプも全部拒否られてるんです」
君枝「なら、私がしますから」
　マキが帰って来る。
君枝「副工場長は？」
マキ「川の方をもう一回見て来るって。（田
　所を見て、うんざりして）邪魔じゃ、帰れ」
田所「お話ししたい事がありまして」
マキ「そんな状況ちゃう。もしかしたら、も
　しかするんやぞ」
田所「それなら余計に」
マキ「ええ加減にせぇ！　常識無いんか！
　お前にかまってる暇ないねん！」
田所「……ご無理言ってすみませんでした。
　出直します」
マキ「出直さんでええ！」
　黙って帰っていく田所。
君枝「あんた、ちょっと言い過ぎやで」
マキ「あたしは家族のために言うた！」
君枝「家族家族て、自分のためやないん？」
マキ「そんな事……」
君枝「お母さんの気持ちを知ってるんか？
　ちゃんと分かってるんか？」
マキ「……」

君枝「あんたはそういうとこ直し」
　マキ、舌打ちをして家を出ていく。
君枝「どこ行くん？」
マキの声「探しに！」
　ため息をつく君枝、するとドアが開いた。
君枝「忘れもんか？」
　帰って来たのはサト子だった。
君枝「あんた！」
　続いてマキと大久保も一緒に入って来る。
マキ「こんな時間までどこで何してたん？」
サト子「車停めて寝てた。スッキリしたわ」
大久保「窓叩いてもなかなか起きないから、
　死んでるのかと焦りました」
　力の抜ける君枝とマキ。
マキ「迷惑かけすぎ」
君枝「まあ、無事でよかった。（思い出して）
　ああ、田所さん来てたで」
サト子「何しに？」
君枝「話したい事があるみたい」
サト子「……」
マキ「会えんで良かった。またツマらん事言
　い出したら、確実に殺してた」
　サト子、出掛けようとする。
マキ「サト子！」
サト子「（固まり）……」
マキ「あんたが出ていくのは構わん。だけど、
　ああいう業界だけは認めへんで」
サト子「ああいうって？」
マキ「女がやる仕事やないって事や」
サト子「プライド持って芸人やってた」
マキ「みんなに笑われて？」
サト子「笑われてたんちゃう！　笑わしてた
　んや！」
マキ「どっちでもええ」
サト子「ええ事ない！　ウチ、お笑いをバカ
　にされるんは許さんから！」
　飛び出していくサト子。
大久保「サト子ちゃん！」
　と追いかけようとするが。
マキ「ほっとけ、あんなクソ妹」

大久保「その言い方は良くない」
マキ「……」
心配そうに出ていった方を見つめる君枝。

○ 走る車・車内（夜）
田舎道を猛スピードで運転するサト子。
軽自動車のエンジンがうなる。
前方にバスが見えて来た。
クラクションを鳴らす、何度も鳴らす。
バスの後部窓に田所が顔を出す。

○ 道（夜）
バスが停留所に停まると、田所が駆け降りて来る。
そこへ車が来て、サト子も降りる。
サト子「間に合った」
田所「ギリギリです」

○ 停まっている車・車内（夜）
運転席にサト子、助手席に田所。
窓を開けると虫の声が聞こえる。
サト子「夜はだいぶ涼しくなったな」
田所「大阪はまだまだ暑いです。……ボク、本気が足りませんでした」
サト子「この前の話か」
田所「だから、会社を辞めてきました」
サト子「はあ？　今から謝りに行き。あのエロ社長なら許してくれる」
田所「決心したんです」
サト子「アホな事やろ？」
田所「個人事務所を作りました。サト子さん、所属芸人になって二人三脚で頑張りましょ」
サト子「確実コケるやん」
田所「次は東京で挑戦しましょう。中野辺りで自宅兼事務所を探します」
サト子「マジか？」
田所「マジです。ガチです。本気です」
サト子「……」
急ブレーキで隣に車が止まる。
大久保が運転し、隣にマキが乗っていた。

○　道（夜）
車が並んで停まっている。
マキが降りて来て、サト子を車から無理やり引きずりおろす。
サト子「何すんの。話、途中やねん」
マキ「話なんかせんでええ。帰るぞ」
田所も車を降りて来る。
田所「ちょっと聞いて下さい」
マキ「聞くかい」
とサト子を大久保の車に押し込む。
田所がマキの腕を掴む。
田所「待ってくださいって」
マキ「離せ」
田所「イヤです」
マキ「お前、またシバかれたいんか」
田所「許して貰えるなら我慢します」
マキ「サト子を連れ出してどうする気や？」
田所「芸人として成功させます」
マキ「身重の女を？」
田所「え？」
マキ「あいつ、妊娠してるんやぞ」
田所が車のサト子を見る、ゆっくりうなずいた。
田所「（驚き）……」
マキ「なんも知らんとこんな田舎まで追いかけて来て、アホ丸出しやで」
とサト子が運転して来た車に乗り込む。
そして窓から田所の荷物を投げ捨てて、走り去る。
大久保も車であとを追う。
ポツンと残される田所。

○　山野家・居間（夜）
サト子を囲むように、君枝とマキと大久保がいる。
重い空気で沈黙が続いている。
マキ「二人で話し合ってんやけど」
君枝「何を？」
マキ「サト子のお腹の子」

君枝「お腹の子がなに？」
マキ「あたしらの子供として育てようかと」
君枝「え……」
サト子「……」
大久保「最初から養子なら問題は少ないだろうと思って。転勤でタイミングもいいから」
サト子、食卓をバンと叩き立ち上がる。
サト子「そんな事させへん！　ウチの子や！」
マキ「なら、どうするん？　あんた一人で育てる気？　それともおろすんか？」
サト子「お前にカンケーない」
マキ「誰にお前て言うてるねん。それにカンケーあるわ」
サト子「ない」
マキ「ある。家族の問題じゃ。それにな」
君枝「（さえぎり）ないで」
マキ・大久保「え？」
君枝「サト子とお父さんが決める事」
マキ「お父さんて、西口は知ってるんか？」
サト子「（首を横に振る）」
マキ「連絡せえ」
サト子「……」
マキ「連絡しろって」
サト子「……」
マキ「今すぐ連絡」
サト子「（さえぎり）絶対、教えへん」
マキ「ほら。だから、あたしらが親切に」
君枝「そういうのを親切とは言わん」
マキ「けど、女一人で子供育てていくのがどんだけ大変か。甘ったれに分かってへん」
君枝「ほんなら、あんたに子供を授かった女の気持ちが分かるか？　理屈やないで」
マキ「……」
君枝「子育ては簡単なもんやない。でも、口出すのは余計なお世話や」
マキ「そんな言い方せんでもいいやん。サト子ばっかりひいきして！」
君枝「してへん。二人とも大事な大事な、お母さんの娘や！」
怒りで震えるマキ、その背中をポンポン

と叩いてなだめる大久保。
玄関のドアが開いた音がする。
田所の声「失礼します」
なんと田所が戻って来た。
体中が汗でびっしょりだ。
サト子「歩いて来たん？」
田所「はい」
唖然と見つめる一同。
君枝が急いで麦茶を持って来て渡す。
田所「すみません」
と一気に飲み干す。
マキ「何しに来た？」
田所「サト子さんを頂きに参りました」
君枝「昨日はお姉ちゃんで、今日はサト子か」
マキ「どっちの意味で言うてる」
田所「どっちとは？」
マキ「芸人としてか、それとも女か？」
田所「両方とも惚れてます」
君枝「確認やけど、冗談やないんやね？」
田所「真剣です」
マキ「サト子のお腹には赤ちゃんが」
田所「（さえぎり）聞きました」
君枝「他人の子を妊娠してるって意味やで」
田所「大丈夫です」
マキ「何が大丈夫やねん？」
田所「これからは、サト子さんとお腹の子を支えていきます」
マキ「暑さで頭おかしなったんか？」
田所「ボクの子供なんです」
サト子「いや、西口の子や」
田所「いいえ、サト子さんが生むのはボクの」
サト子「あんたとは何もないやん」
君枝「田所さん、この子は借金もあるで」
田所「退職金と少し貯金があるので当分は問題ありません。気にせずに芸人活動に励めます」
マキ「あんたは完全に狂ってる。知名度もない子持ちの女が成功するはずない。そんなやつ、今まで見た事ない」
田所「逆にチャンスです」

とカバンからタブレットを出し、見せる。
田所「現在、売れてる女性芸人の一覧です。ピン、コンビ、男女コンビ、トリオ、ユーチューバーなど様々います」
黙って聞いている一同。
田所「しかしシングルマザーは一人もいない。実力もあり、経験もあり、子供はネタの宝庫です。その上、マーケティング的にも狙い目」
マキ「全く話にならん」
田所「子供を産み、育てながら芸人もやる。これからはそういう女性の時代になっていきます。その道を作れる方なんです」
マキ「お前な」
田所「（さえぎり）サト子さんは！」
マキ「何じゃ？」
田所「サト子さんは……クソおもしろい天才芸人です！」
静まり返る室内。
君枝「もうお母さんらの口を挟む事やない。あんたの問題や。どうするんや？」
サト子「……」
マキ「ここで間違えたら、二度と帰って来られへんと思いや」
サト子「……」
田所「ボクに付いて来てください」
一同、サト子が話し出すのを待つ。
サト子「……無理」
田所「無理？」
サト子「無理無理無理」
田所「何が無理なんです？」
サト子「だって、あんたをそういう目で見た事ないもん」
田所「じゃ、じゃあ、芸人、芸人としては？」
サト子「自信無い」
田所「相方とか性別とか子供とかを理由にしないで、令和時代の女芸人を目指しましょう。もう逃げないでください！」
サト子「……ホンマにごめん」
田所「……」

マキ「残念やったな」
と田所の肩を叩き、出ていく。
シンとなる部屋。

○　同・トイレの前（夜）
君枝がトイレから出てきた途端、心臓を押さえて座り込む。
そこへマキが来る。
マキ「オカン！」
サッと立ち上がる君枝。
君枝「平気平気。いつもの不整脈」
マキ、不安そうに見つめる。
君枝「大丈夫やて」
とスキップして去っていく。

○　同・サト子の部屋（夜）
暗い部屋でスマホを見ているサト子、液晶の光で無表情な顔が浮かんでいる。
画面には、芸人時代の楽しそうな動画が映っている。
サト子、起き上がって明かりを点ける。
引き出しの手帳を全てゴミ箱に捨てる。
すると戸が開き、君枝が入って来た。
君枝「あの人」
サト子「田所さん？」
君枝「出て行ってしもた。バスもないのに」
サト子「野宿にはいい季節やろ」
なかなか去らない君枝。
サト子「どうしたん？」
君枝「あんたの好きな通りしてええんよ」
サト子「え？」
君枝「この家から出て行き」
サト子「副工場長が転勤になったら、ウチらだけになるんやで」
君枝「ううん、お母さん一人や」
サト子「なんで？」
君枝「気ままに暮らしてみたいねん。せやから、サト子にはおらんなってほしい」
サト子「強がりや」
君枝「本音やで。子持ちの三十路娘はウザい」

サト子「村の人にも陰口言われるで。お母さん一人残して下のはまたアホな事してるて」
君枝「そんなん言うの、この辺りの人だけ」
サト子「それでも、きみちゃんはこの狭いど田舎に死ぬまで住み続けるんやで」
君枝「お母さんは何言われても平気や」
サト子「……ホンマは体が一番心配やねん」
君枝「……」
サト子「四年前にオトン死んだやろ」
君枝「死に顔が一番生き生きしてたわ」
笑ってしまうサト子。
サト子「真面目に話してるねん」
君枝「ごめんごめん」
サト子「親もいつかは死ぬやろうて漠然とは思ってた。だけど、実際なるまではリアルやなかった」
君枝「それはお母さんも一緒」
サト子「でもな、きみちゃんはリアルに感じる。それが心配で心配で……たまらへん」
君枝「おしゃべりな医者が何言うたか知らんけど大丈夫や。あいつ、あんたの妊娠もすぐ吐いたで」
サト子「やろうな」
君枝「お母さんはまだまだ死なん」
サト子「ホンマ？」
君枝「ホンマ」
サト子「……でも、ウチはここにおりたい」
君枝「あんたのアカンとこは、中途半端に優しいとこや」
サト子「ちゅーとはんぱ？」
君枝「お母さんがかわいそう。お姉ちゃんに迷惑かけられへん。元相方さんにも情があったに違いない」
サト子「……」
君枝「人生に与えらえた時間は少ない。あーだこーだ言うより動き。故郷なんか親なんか捨て。そうやないと幸せは掴まれへんで」
サト子「(うつむいて) ……」
君枝「サト子、早く家から出て行って」
サト子「……」

部屋を去る君枝。

○　道（夜）
月明かりの中、田所が歩いている。
疲れて地面に座り、スマホを触る。
電池がなくなる。
田所「クソー！」
むなしく声が響く。

○　バス停エレクトロ工場前への道（早朝）
寝間着姿のマキが歩いていくと、バス停に田所がいる。
隣にマキが立つ。
マキ「帰るんか？」
田所「東京へ行きます」
マキ「そ」
田所「何か用ですか？」
マキ「昨日、言い過ぎたと思って謝りに来た。……すまんかった」
田所「こちらこそ、度々押しかけまして」
マキ「ほんなら」
と行きかける。
田所「あの」
マキ「ん？」
田所「向こうで落ち着いたら、もう一度、サト子さんを迎えに来ます」
マキ「……」
田所「絶対に諦めません」
マキ「……」
始発のバスがやって来る。

○　山野家・居間
そーっと階段を下りて来るサト子、大きなキャリーバックを持っている。
君枝が待ち構えていた。
サト子「ウチ……」
君枝「お父さんに手ぇ合わせてから行き」
うなずき、父の遺影に手を合わすサト子。
君枝が仏壇の引き出しを開ける。
そこからスクラップブックを取り出し、

サト子に渡す。
捲るとサト子のデビュー当時から、最近の記事までがまとめられていた。
サト子「(驚いて)……」
君枝「宝物やで」
サト子「お父さんの」
君枝「ちゃう、家の」
サト子「家……」
君枝「雑誌やスポーツ新聞、インターネットでも。あんたの名前や写真がちょっとでもあったら、必ず集めて貼ってた」
サト子「……」
君枝「お父さんだけやない。家族で楽しんで見てた。みんなでサト子を応援してたんよ」
サト子、改めて君枝を見る。増えた顔のシワ、丸くなった背中、白髪交じりの髪。
君枝「歳取ったやろ」
サト子「まだまだ若い。犬でいうたら十歳や」
君枝「犬で言いなや」
サト子「(君枝の髪を触り)綺麗にしとかな」
君枝「誰も見せる人おらん」
サト子「孤独死の時、警官にじっくり見られる」
君枝「勝負パンツは毎日履いてるで」
笑顔になる二人。
君枝「あんたは、山野家の宝や。超一流のお笑い芸人になって貰わな困る!」
サト子「(嗚咽で何も言えない)」
君枝「泣いてる時間ない。はよ、追いかけな間に合わへんよ」

○　同・玄関
サト子が靴を履いて振り返り、感慨深げに家を眺める。
そこに君枝が小走りでやって来る。
君枝「大事なもん忘れてる」
と十数冊の手帳を渡す。
サト子、受け取ってカバンに直す。
見つめ合う二人。
君枝「子育ては難しいな。思春期だけ大変や

と思てたら、ずっとずっと気がかりで……」
と涙ぐむ。
サト子「きみちゃん、泣いたらアカン」
君枝「ぴえん超えてぱおんやわ」
突然ドアが開く、マキが帰って来た。
サト子「お姉ちゃんが反対しても行く。何言うても無駄やから！」
とマキを押しのけて出ていく。

○　同・表
サト子がキャリーバックを引きながら早足で歩いていく。
マキ、走って来て捕まえる。
サト子「もう決めてん。止めんといて！」
マキ「どアホ、黙ってついて来い！」
と手を引っぱり、無理やり車に乗せる。
マキも乗車し、エンジンをかける。
家から君枝が出て来た。
君枝「お腹冷やしたらアカンでー」
急発進する車。

○　走る車・車内
スピードを出して運転するマキ。
助手席にはサト子。
マキ「あいつ、ええ度胸してる。あたしに堂々と物言うた。一回シバかれてるのに」
サト子「お、お姉ちゃん……」
マキ「何も言うな」
サト子「……」
マキ「やっぱ言え」
サト子「どっちやの」
マキ「なんや？」
サト子「……ありがとう」
マキ「そんなしょーもない事しか言えんなら売れんぞ」
サト子「やっぱ、お姉ちゃんキツイ」
マキがダッシュボードから封筒を取り出し、サト子に渡す。
五十万円入ってあり、驚くサト子。
マキ「隣村のコンビニ行っておろして来た。

あげるんちゃう、投資や。色付けて返せ」
サト子「やっぱ、お姉ちゃん優しい」
マキ「現金なやつ」
　サト子、マキの横顔を見つめる。
マキ「ん？」
サト子「きみちゃんに似てきた」
　舌打ちするマキ。
マキ「で、最後、オカンに何言われた？」
サト子「『ぴえん超えてぱおん』やって」
マキ「ほな、あたしはぱおん超えてがおーや」
サト子「スベってるで」
マキ「やかましい」
　少し間がある。
サト子「きみちゃんの事なんやけど……」
マキ「大丈夫。あたしに任しとけ」
　バスが見え、アクセルを踏みこむマキ。
　エンジン音が甲高くなる。
サト子「キャー！　ウチ、妊婦やで」

○　道
　バスの前に飛び出し、急ブレーキで停まる車。バスも急停車する。
　サト子が外に出ると、田所も慌てて降りて来る。
　田所は荷物を受け取り、車のマキに一礼。
　そして二人はバスに乗り込む。
　マキは車窓から上半身を乗り出し、叫ぶ。
マキ「サト子ー、負けんなー」
　バスの中のサト子には聞こえず、「なんて？　なんて？」と聞き返している。
マキ「あたしー、ずっとずっとあんたのファンやった。死ぬまで応援するからなー」
　バスはクラクションを鳴らし、マキの車をよけて走り去る。
　体を出したままのマキ、手を振る。
マキ「田所さーん、命懸けでサト子守れよー。ホンマに、ホンマに弱い子やねん。あとな……。（寂しそうに）行ってもうた」

○　走るバス・車内

サト子と田所が、運転手の後ろに座る。
運転手は来た時と同じ人だ。
運転手「危険乗車はおやめください」
サト子・田所「すみません」
窓外につり橋が見える。
運転手、ミラーを見てサト子に気付く。
運転手「あれ……この前のおネエちゃん？」
サト子「無事、生還しました」
運転手「（嬉しそうに）やっぱりあんたか！」
田所「（改まって）本当に来て頂いてありがとうございます」
サト子「確認しとくけど、芸人として付いていくだけやから」
田所「えー」
サト子「当たり前。あんたを詳しく知らんし」
田所「ボクは十年間ずっと見て来たので」
サト子「ウチを美化しすぎやねん。前は、酒もタバコも博打もめちゃくちゃしてた」
田所「全然、大丈夫です」
サト子「西口以外ともエッチしてた。仕事貰うためにプロデューサーと寝た事もあった」
田所「それは過去の話」
サト子「あと。（手帳を見せ）勝手に書き込んだやろ」
田所「どうでした？」
サト子「ネタは芸人の聖域。口出し禁止や」
田所「すみません」
少し間がある。
サト子「それから……絶対、生むから」
田所「言いましたよね。サト子さんが生むのはボクの子だって」
サト子「もうええって」
田所「それから舞台にはギリギリまで立って貰います。お腹が大きくなっていく画像や動画をあげればバズる可能性も高いので」
サト子「ブラック事務所やん」
田所「泥臭くがっついてでも仕事を取ります。絶対に売れっ子にさせますんで」
サト子「あんた、芸人のマネージャーとしてはパーペキ」

田所「男としては？」
サト子「なしよりの」
田所「あり？」
サト子「なし」
田所「ショックー」
　二人、窓外を眺める。
サト子「しかし、あれやな。相方の浮気相手の妊娠で解散して地元戻ったのに。今度は自分が妊娠して出ていくんやもんな」
田所「皮肉なものです」
サト子「ま、つかみのネタで使えるか」
田所「さすが芸人さん。転んでもただじゃ起きません」

○　十津川駅・表
　バスが来て、停まる。
　サト子と田所が降りて来る。
　向かいから中年三人組がやって来た。
女１「あ、サト子やで」
女２「男連れとる。また、村出ていくんやわ」
女３「親置き去りにしてか」
田所「（サト子に）無視して行きましょう」
　サト子、おばちゃんたちの前に立つ。
サト子「ウチはこんな田舎では収まりきらん。だから東京で一旗揚げて来る。さいなら」
田所「うちのサト子を、これからもごひいきによろしくお願いします」
女１・２・３「（呆気に取られ）……」
　サト子は肩で風を切り、歩いていく。
　田所も付いていく。
　地面に落ちているモノを拾うサト子。
　それはインフォニックソードだった。
田所「インフォニックソードですね」
サト子「あんた、知ってるん？」
田所「家電や自動車や文房具、何にでも使われてます。確か、リサイクル部品です」
サト子「リサイクル……ウチと一緒やん」
　とポケットに入れる。
　そして二人は笑顔で駅に消えていく。
　八月終わりの空に、真夏のような太陽が

出て来てセミが鳴き始めた。
今日も残暑が厳しそうだ。

【了】